

中山茂，石山洋著『科学史研究入門』

東京 東京大学出版会 1987.11 xiii, 352p.

源 昌 久\*

本書は、科学史の分野で活躍している中山茂（東京大学教養学部）と石山洋（国立国会図書館）によって書かれた、これから科学史や技術史の研究をしたいと志す人々のためのハンディなガイド・ブックである。

経済学および関連社会科学の資料を扱うライブラリアンや研究者を主な読者対象とした本誌『経済資料研究』に評者が、一見畑違いの分野の書物と思われる『科学史研究入門』をとりあげて頂きたいと考えた理由をはじめに述べておこう。

第一に、著者のひとり中山が、「科学史とは、科学をその対象、歴史をその方法とする学問である」、「しかし結局は科学史の仕事は歴史として評価されるべきであって」（p.8）と言っているように、科学史は、自然科学の一分野ではなく、歴史学という人文・社会科学の一分野である。第二に、イギリスのJ. D. パナールやJ. ニーダムに代表されるような、史的唯物論による科学史を持ちだすもなく、社会経済史

と科学史・技術史との関係は密接である。また、T. S. クーンの『科学革命の構造』（1962）のパラダイム論が出現してから、社会学者が科学史の研究分野に進出して、科学社会的アプローチが盛んになってきている。

以上のように、科学史は決して経済資料協議会の会員にとって無縁な自然科学の図書ではなく、社会科学の図書である。さらに、この方がむしろ本当の理由かも知れないが、評者は、この書物を通読して、その構成と内容が、いま経済資料協議会がとり組んでいる『日本経済資料ハンドブック』の編集に大変役に立つことを発見したのである。どこが役に立つかということは、この書評全体で答えたい。

まず、本書の構成は次の通りである。

第Ⅰ部（中山担当） 科学史研究の動向：アメリカ、イギリス、フランス、イタリア、ドイツ、オランダ、スカンディナビア、ソビエト連邦、インド、中国、韓国、国際科学史学会、日本。  
第Ⅱ部（石山担当） 文献案内 1

\* みなもと しょうきゅう 淑徳大学社会福祉学部

文献利用の手引：(1) 図書館・文書館・博物館の利用 (2) 科学史文献の検索 (3) 文献目録の編纂にあたって。2 文献目録・解説：通史・科学史全般，東洋科学史，日本科学史，以下，数学史から大学史までの22学問領域に分類して基本的文献のガイドを行う。巻末に人名索引(外国人名・日本人名別)が付されている。

次に，内容を簡単に紹介しよう。第Ⅰ部の国別科学史の動向では，アメリカにおける科学史の開拓者G.サートンが講義をしたハーヴァード大学で科学史の Ph. D. をとられた中山が，アメリカ，イギリスの事情に強いのは当然であるが，その他のヨーロッパ諸国の動向についてもできるだけ新しい情報を集めて紹介している。また，日本の動向を紹介するなかで，科学史家への道という項で，科学史家の資質と資格の問題を論じ，資料と研究方法についてふれ，1950年代に氏がアメリカで科学史の大学院生として学んだ頃の研究生産の技術を紹介しているところは特に興味深く読んだ。

第Ⅱ部は，初心者，専門外の人に向けた手引きと文献目録・解説とから成る。「1 文献利用の手引」は，実際に研究をはじめるときに，資料の所在を探し求めるためのガイドで，「(1) 図書館・文書館・博物館の利用」では，国立国会図書館，日本における主要な科学史のコレクション，博物館について解説している。「(2) 科学史文献

の検索」では，はじめに1次資料と2次資料の二つの使い方を説明する。原資料を1次文献，研究書・論文を2次文献，一般読者向けにまとめた教科書・啓蒙書・概説書の類を3次文献と定義するのは大方の教科書の使い方であり，第Ⅰ部の中山もこの意味で使っている。しかし，石山は，「1次資料 primary source とは，著者のオリジナルな着想を記述した資料であり，この著者は情報の生産者として位置づけられる。これに対し，2次資料は多数の1次資料の中から必要な文献を検索するのに便利のように，それらの多数の1次資料を一定の順序に並べたものをいう。書誌とか，文献目録と味ばれるものである。」(p.159)という，図書館学の用法に従う。

次に科学史の主要な国内雑誌22種の解説と，国内および海外の主要な科学史の雑誌の検索の道具をあげ，また，邦書と外国の図書の本所在調査の道具をあげ，最後に外国の図書館への複写依頼の方法を説明している。

第Ⅱ部一(3)「文献目録の編纂にあたって」では，文献調査の基本的事項や研究方針にかかわる資料が紹介されている。2部にわかれ，a. 選択の目安と，b. 研究の必携から成る。a. では，第Ⅱ部一2であげる文献目録の選択の目安を単行書に限定し述べているが，雑誌論文の重要性を軽視したわけではなく，雑誌『科学史研究』に，先年，連載された各分野の科学史

の研究展望を37編あげている。次に、既刊の研究案内、方法論に関する図書10件の解説がある。b. では、事典、年表等の参考図書14件を解説している。

第Ⅱ部一2は解説付き文献目録である。著者〔石山〕は、収録範囲について次のように記している。「第Ⅱ部一2として掲げる文献目録では、決して網羅的に科学史の文献を紹介しようとはしなかった。日本で刊行され、大学図書館や都道府県立あるいは大都市の公共図書館では大体所蔵していると思われる範囲で単行本に限って、その書誌情報を掲げた。それも、教養課程の教科書式のものや啓蒙的読みものに終始するエピソード集などは省いた。」(pp. 172~173)。以上の方針のもとに、日本で刊行された日本語の単行書を列挙して簡単な解説を加えている。

洋書については、上の理由によって、あげられていないが、翻訳書は、無論、掲載され、しかも原書のタイトルと出版年がほとんど記るされている。欲をいえば、原書の記述に出版者があるとなお良かったのであるが。また、この文献目録は、「現在ガーランド社で進行中の科学史の類別欧文文献目録プロジェクトのうちの、*Bibliography in the History of Chinese and Japanese Science* (中山編)と連動するものであることを付け加えておこう。」(p. v). と述べられている。

文献の選択については、かつて『科学史研究』の編集長を勤め、また、同

誌上に、日本科学史学会の求めに応じ、日本語の科学史文献の目録を作成して1965年分から連載してきた著者の眼は十分信頼できよう。ただし、評者の専門の地理学史の項を見ると、上記の条件に合い、重要と思われる若干の図書が、洩れているように思える。例えば、山口貞雄著『日本を中心とする輓近地理学発達史』(済美堂 1943: 復刻版 大明堂 1983)、スケルトン (Skelton, R. A.)『世界探検地図——大航海時代から極地探検まで——』(増田義郎、信岡奈生訳 原書房 1986)。等は、評者ならば記載したいところであるが、これは見解の相違であろう。

収録期間は、評者の調べた範囲では、戦前から1986年刊行までの長期間にわたっている。

記載された図書の解題は、石山の「主観的判断」(p. vi)にもとづく、いわゆる、‘コメンタリー・アプローチ’タイプの解題が簡潔に付されている。ただし、巻末の参考文献、年表等の記載が若干洩れているようなケースも見うけられたが、これは、本文献目録にとってはほんのかすり傷であろう。筆者は、この文献目録を実に楽しく読み、筆者の専攻する地理学史の研究に有益と思われる多くの関連領域の図書を発見することができたことを報告しておきたい。

なお、ベテランの石山が作成した、この文献目録の記述は、実によく注意が行き届いており、これまで様々な分

野で刊行されている‘入門書’と題する書物の巻末などにある文献リストの不完全なもの（副書名、出版年などを欠く）とは全く雲泥の差である。

最後に、全く技術的なことであるが、『科学史研究入門』再版に際して二つほどお願いを述べさせてもらいたい。一つは、第Ⅱ部の文献目録中における書名は、アンダーラインを付けるか、ゴシック活字体を使用するかして見やすくしたらどうであろうか。もう一つは、索引についてである。本書中에서도、「収載した文献の書名についても索引を作成すべきではあろうが」（p. vi）と述べられているが、やはり、書名索引を付けていただきたかった。ついでに、件名索引があれば、利用者にとってはさらに便利であろうと思う。

ここで本書と書名が似ている『科学史入門——史料へのアプローチ』（柏木肇、柏木美重編著 内田老鶴圃 1984年 xx, 527, 190p. なお、本書

についての書評は、藤井清久：『科学史研究』第Ⅱ期第24巻 No.153 1985年春 pp. 40～42. を参照）についても、比較の視点から少し述べておこう。本書は、ナイト（D. M. Knight）の“*Sources for the History of Science 1660—1914*”を底本に、著者らが補筆したものである。『科学史研究入門』とは、その構成内、容共に異なる。『科学史研究入門』が、最近の各国の研究動向や我が国で出版された単行書に重点を置いて解説されているのに対し、『科学史入門』は、科学史の概念的フレーム・ワークの説明、イギリスを中心とした史料・文献案内に重点を置いている。従って、この両書は補完的性格をもつといてよく、『科学史研究入門』で不足している海外の文献を検索しようとするライブラリアンや研究者は、『科学史入門』を活用された方がよいであろう。

(1988. 3. 15)